

歴史時代考古学の視点(二)

藤 井 直 正

一 荘園の考古学

『角川日本史辞典』を見ると、「荘園」について次のように記されている。

奈良時代から戦国末まで存在した田地を主体とした私的所有地。所有者が、その私有地から隔たった場所、すなわち主として京都やその近辺に住む貴族や寺社で、律令国家において政治的地位をもっている者であることが特徴。所有者は、現地の経営のため倉屋を含む事務所を設け、荘官をおいて経営にあたらせる。その事務所を庄または庄取所といい、そこを庄所というところから、その所を何々庄という。今日文献にその名が知られる荘園数は四〇〇〇に近く、北は陸奥・出羽から南は大隅・薩摩の全国的に分布。特に畿内およびその周辺に密集している。(以下略、傍点筆者)

私が、考古学の立場から荘園に関心を持つようになったのは、各荘園における土地の占定、荘域の決定に当たって、その四至を明示する施設、すなわち“勝示”の遺構を考古学の対象として取り上げ、これの調査を着手したことに始まる。このことについては、当時の所見をまとめて「“四至”と“勝示”考」(『大手前女子大学論集』第十二号)に述べたが、それ以後は単に勝示だけでなく、現在のこされている歴史的景観や、荘園内の遺構についても全体的にとらえて見るという方向にひろがって来ている。荘園の総数は、冒頭に引用した辞典の解説文中に記されている通り全国に四〇〇〇カ所も存在するということであり、そのすべてを対象とすることは個人の研究としては至難である。そこで一先ず対象を絵図ののこっている荘園ということに限定し、機会を見つけて現地に出かけ現状調査を試みることにしている。また、こうした私自身の関心をふまえ、史学科学生の卒業論文の指導に当たって、学生の居住地が荘園の所在地である場合には、その荘園を対象として、現地の景観や土

歴史時代考古学の視点(二)

地の状況を主とする歴史地理学観点と、遺跡・遺物を対象とし、さらに文献史料も合わせて取り上げる歴史考古学の視点から、荘園の歴史と動向をたどり、それを基礎として地方史をまとめ上げるといふ方法での指導をつづけて来た。ここ数年間における研究活動をふりかえって見ると次のようになる。

年 度	対象とした荘園	所 在 地	年 度	対象とした荘園	所 在 地
昭和五二年	若狭国太良荘	福井県小浜市	昭和五五年	備中国新見荘	岡山県新見市
〃	播磨国鰯荘	兵庫県揖保郡太子町	昭和五六年	伯耆国東郷荘	鳥取県東伯郡東郷町
昭和五三年	紀伊国神野・真国荘	和歌山県海草郡美里町	〃	紀伊国野上荘	和歌山県海草郡野上町
〃	〃	伊都郡笠田町	昭和五七年	和泉国日根荘	大阪府泉佐野市
〃	越後国奥山荘	新潟県北蒲原郡中条町			

1 荘園跡の調査と研究

すでに前稿で述べたように、勝手を対象とした調査・研究としては、谷岡武雄氏による播磨国鰯荘⁽¹⁾、井上鋭夫氏による越後国奥山荘⁽²⁾があり、最近では備後国太田荘の遺例がとり上げられ⁽³⁾、また岡山市教育委員会によって、備中国足守荘の勝手について、はじめて考古学的調査が行なわれた⁽⁴⁾。

最近における考古学全体の動向として、歴史時代遺跡とくに中世・近世の遺跡を対象とする調査・研究がいちじるしく増加して来たことを指摘することができる。それは考古学関係者の関心はもとより、開発に伴う調査が全国を席捲し、考古学の対象が原始・古代に止まらず、中世・近世の遺跡についても否応なく発掘調査を実施しなければならぬということにも起因しているのである。こうした動向については、『考古学ジャーナル』や『歴史公論』がいち早く特集号を組み、各地の担当者によって所見が述べられている⁽⁵⁾。

よく知られているように、考古学的見地に立っての荘園跡の調査としては、昭和二十七年に行なわれた、現在の福井市に所在する東大寺領養置荘の調査⁽⁶⁾が嚆矢であり、つづいて昭和三十七年における同じ福井市の東大寺領道守荘の調査がある⁽⁷⁾。以後しばらくはこの方面の調査がとぎれだが、昭和四十五年になって、富山県下新川郡入善町に所在する「じょうべのま遺跡」の調査が行なわれ、平安時代前期の建物群が検出され、

莊園の庄家跡に比定されている⁽⁸⁾。また石川県松任市の東大寺領横江莊でも庄家跡と推定される遺構が検出されている⁽⁹⁾。

こうした調査にもとづく成果から、あるいは文化財保護の見地から、莊園跡の保存が問題となって来た。莊園跡の保存をめぐる問題は、養置莊の調査の際に発しているが、何しろ莊園跡は、他の遺跡とちがって広大な面積にひろがり、その全域を保存するということはさまざまな隘路があり保存策の樹立が立ち遅れていた。しかし前記の調査成果をふまえ、東大寺領横江莊家跡と高瀬遺跡が昭和四十七年に、じょうべのま遺跡が昭和五十四年に、それぞれ史跡に指定された。また奥山莊では江上館跡が調査され、全域を史跡として保存することが計画されている。こうした動きについては、文化庁にあって直接史跡保存に当たられて来た北村文治氏の一文に総括されている⁽¹⁰⁾。

こうして見ると、莊園遺跡の調査・研究と保存が、日本海に面した北陸地方に集中しているような感じを受けるが、それはこの地方が、莊園の初期段階ともいえる東大寺領莊園の集中する地域であり、それに加えて開田図や、莊園の開発状況とその歴史的背景を物語る文献史料が豊富に遺存し、莊域を把握し易いこと、これまでまったく農村地帯であって、自然地形と合わせて莊園の景観がよく保存されて来たこと等がその理由であろう。

一方、西日本においても、莊園中の莊園ともいえる備中国新見莊では、中国縦貫道が莊域内を通ることとなり、その建設工事に先立って、莊域の一部である祐清塚と二日市において発掘調査が行なわれた⁽¹¹⁾。また絵図ののこっている備中国足守莊では、絵図に見える延寿寺の比定地と傍示について、さらに備後国太田莊でも考古学的立場に立つての調査が進められていることは先に述べた通りである⁽¹²⁾。

いま一つ付け加えると、特定の莊園を対象としないまでも、遺跡の調査によって古代末期から中世にかけての遺構や遺物が検出されている例は、全国的に見ると相当数に上がることが予想される。これらの遺構の所在地について、文献史料との対比によって、その遺跡の性格を考えることも重要な作業である。大阪府高槻市に所在する上田部遺跡や宮田遺跡で検出された遺構を中心に、古代・中世村落の復原に迫られた原口正三氏の一連の労作もこの際想起しなければならない⁽¹³⁾。

私自身も、昭和五十一年、四日市市教育委員会によって行なわれた小判田遺跡^{こはんだん}の調査を、同市に赴任したばかりの北野保君の慫慂によって見学し、その報告書に私なりの所見を寄稿する機会があった。三重県四日市市芝田二丁目に所在する集落遺跡であるが、検出された遺構や、出土遺物の中に木簡・墨書土器等があり、時代は中世であるが官衙的色彩をもつものであることから、『神宮雜例集』や『神鳳鈔』に見える伊勢神

歴史時代考古学の視点(二)

宮領の御厨であり、物資の集散、すなわち四日市の地名の源となる市場的性格をもつ遺跡ではないかという仮説を提出したが、とりも直さずこうした視点に立っているのである。¹⁴⁾

荘園の遺跡を考古学として取り上げる場合、是光吉基氏が述べられているように、集落跡・館跡・墳墓跡・産業遺跡・信仰関係遺跡を個別的に捉えるに止まらず、それを有機的な関係のもとで把握すること、さらに考古学プロパーだけでなく、文献史学・歴史地理学・民俗学等、広い分野を総合した多角的な調査・研究が必要であろう。

- (1) 谷岡武雄氏『聖徳太子の榜示石』(昭和五十一年一月、学生社)
- (2) 井上鋭夫氏「越後国奥山荘の榜示について」『日本歴史』第一六三号、昭和三十七年一月
- (3) 是光吉基氏「備後国大田荘」『考古学ジャーナル』第一八二号、昭昭五十五年十月
- (4) 岡山市教育委員会『足守庄荘園緊急調査、延寿寺跡第2次調査概報』(昭和五十四年三月)
- (5) 『考古学ジャーナル』は第一八二号(昭和五十五年一月刊)に「中・近世考古学の動向」を特集して荘園をとり上げ、『歴史公論』は第七巻第五号(昭和五十六年一月刊)「歴史時代の考古学」の中で扱っている。
- (6) 直木孝次郎・藤原光輝氏「福井県東大寺糞置庄発掘調査略報」『史叢』第一巻第一号、昭和二十八年
- (7) 大西青二氏「東大寺領道守庄遺跡調査概報」『日本歴史』第二四四号、昭和四三年一月
- (8) 『じようべのま』(『富山県埋蔵文化財調査報告書』IV、昭和五〇年)
- (9) 「史跡の新指定・東大寺領横江荘家跡」『日本歴史』第二七七号、昭和四十六年六月
- (10) 北村文治氏「古代史学の現況と史跡保存」『日本歴史』第四〇二号、昭和五十六年十一月
- (11) 岡山県教育委員会「新見庄関連遺跡」『中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査10』
- (12) 出宮徳尚氏「岡山県足守庄荘園遺跡」『日本考古学年報32』昭和五十七年三月
- (13) 原口正三氏「考古学からみた原始・古代の高槻」『高槻市史』第一巻、昭和五十二年) など
- (14) 藤井直正「遺構・遺物とその性格」『小判田遺跡』『四日市市埋蔵文化財文化財調査報告12』、昭和五十二年三月

ここで最近とくに関心を持ち、数回にわたって現地を訪れた和泉国日根荘について、私自身の視点に立っての見聞を記して見ることにする。

和泉国日根荘は、現在の大阪府泉佐野市に所在した荘園で、鎌倉時代の天福二年(一二三四)左弁官が和泉国に命じて九条家領荘園として立荘

を許可して以来、戦国時代の天文年間（一五三二～五四）に至るまで九条家領として存続した。豊富な文献史料にめぐまれていることから、多くの研究論文があり、昭和三十三年に刊行された『泉佐野市史』にその歴史が要約されている。また、稲垣泰彦氏編の『莊園の世界』（東京大学出版会、昭和四八年刊）に、「都市貴族の下向直務と中世村落―和泉国日根莊―」にわかりやすく概要が述べられている。とくに当莊の場合、莊園の成立、支配と村落の実態をたどることのできる史料のほかに、正和五年（一三一六）に作成された絵図（日根野村絵図）が遺存している⁽¹⁾（第1図）。この絵図には、莊域と山川・池などの地形、莊域内の村落・田畠・寺社等が具体的に記されていて、現地の状況を明確に把握することができるのであり、標題として掲げている考古学の視点から莊園を対象とする調査・研究にとって絶好の条件を揃えているのである。

まずこの絵図によって莊域と莊域の地形をたどって見ると、絵図は地形に従って東を上にし、扇状地上にひろがる日根莊の地域を描いているが、東方と北方には山丘、右上方から斜めに下る川の流れ、左方の山丘と田畠の間にはそれぞれ名称を付した池の並ぶ様子が描かれている。本来の日根莊の地域は、これよりも東方に上った山間部もふくまれているのであるが、この図が平野部の開墾に伴うものであることから、この範圍に焦点がおかれたと考えられる。

絵図に見える地域は、現在の泉佐野市域の中心部に当たり（第3図）、絵図の下端に「熊野大道」と記された道は紀州街道で、現在も旧道として遺存している。市域はさらに海岸線にまで延びているが、当時における日根莊の西端はこの街道までであったのであろう。大阪府下とはいえ、泉南地方の特産物である玉葱畑のつく田園地帯であり、莊園の存在した中世のすがたをとどめている（第2図）。それだけに、今後における開発の進行に伴う現状の改変にそなえて、現状を記録しておくことの必要と、莊園内に存在していた諸施設を絵図に記載されている様相に準拠して、地下遺構の上で確認する考古学的調査が可能であり、しかも緊急を要していることを指摘しておきたい。従って泉佐野市における埋蔵文化財行政としては、神社跡・寺院跡というように個々の遺跡ではなく、日根莊全域を一つの遺跡としてとらえ、開発に対する規制と調査を行う体制が必要である。そうした観点に立つて、絵図に見える主要な個所を抽出して見ることとする。

歴史時代考古学の視点(二)

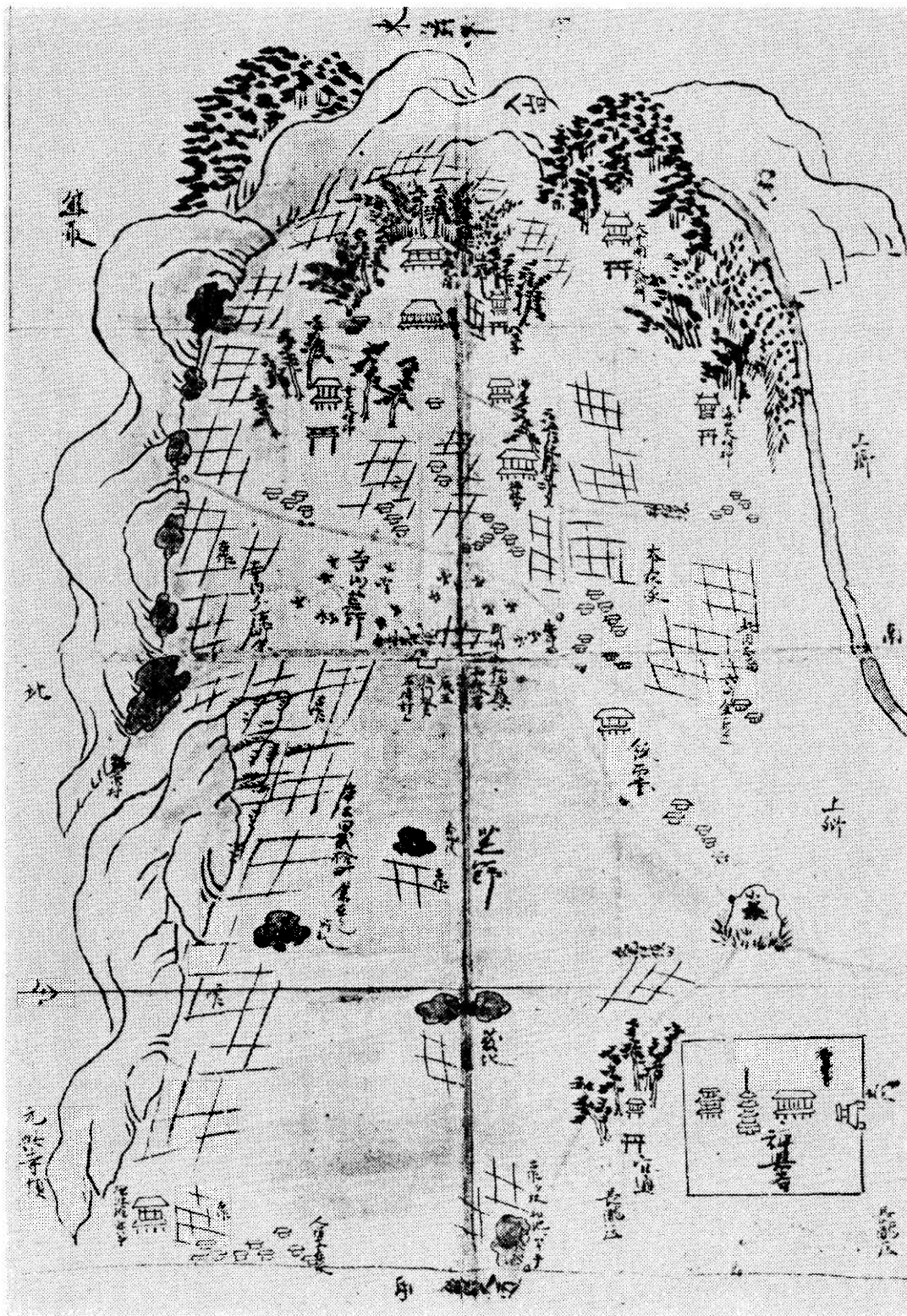
名 称	記 載 表 現	所 見
大井開 ^(マツ) 大明神	社殿と鳥居を描く。	大井関大明神のことで式内日根神社である。
溝口大明神	社殿と鳥居を描く。	本来は別のところに祀られていたが、現在は日根神社境内に移されている。
穴 通	社叢と社殿・鳥居が描かれている。	蟻通神社のことで、太平洋戦争中に飛行場用地となり現在地に移転。
八 王 子	社叢と社殿・鳥居が描かれている。	無辺光院の東南に位置しているが、現在はない。八王子の刻銘のある石標が土丸の春日神社境内に所在。
丹生大明神	社叢と社殿・鳥居が描かれている。	現在は日根神社境内に祀られている。
無 辺 光 院	「無辺光院」と記した仏堂とその前に、「僧坊」と記した藁葺又は萱葺の建物、少しはなれたところに湯屋」と記された建物が描かれている。	日根荘の政所であったことが史料によって知られる。仏堂・僧坊から下ったところに「無辺光院跡」として「但門破失石居計ル」とあるのは山門跡であろう。
飯 堂	図の中央左寄りに「飯堂」として仏堂らしいものが描かれている。	
小 塚	不整形の輪廓と草叢が描かれている。	現在「久ノ木」の三叉路に板状の石が立っているところがこれであろう(第4図5)。勝手であった可能性が大きい。
禅 興 寺	絵図の右下に長方形の輪廓と塔をふくむ四棟の建物が描かれている。	隣接の長滝庄の地内であるが、日根荘成立以前から存在した古寺で、当時伽藍をのこしていたのである。
檀 波 羅 密 寺	絵図の左下「熊野大道」に沿ったところに建物が描かれている。	現在の市庁舎の所在地から東方にかけて「檀波羅」の地名をのこしている。

以上、寺社を中心に抽出して見たが、この他に田畠、莊域内に散在する集落・民家・池などが克明に記載されていて、莊園絵図の中でもめずらしく豊富な内容のものとなっている。これら個々の寺社についての考証は本題から外れるため別の機会にゆずることにしたい。このうち寺院と仏堂については、地下に遺構をのこしていることが予想され、現地における位置の比定も可能であり、すでに紹介されていることもあるがこれを考古学的見地から受け止め、機会を見つけて発掘調査を実施することは、莊園の考古学という学問の対象だけではなく、文化財保護の見地からも喫緊を要している現代的課題と考える。なお、檀波羅密寺跡については、先年その敷地が市庁舎の建設と道路敷設のための用地となり、一部が大阪府教育委員会によって発掘調査が実施されていることを附記しておく。

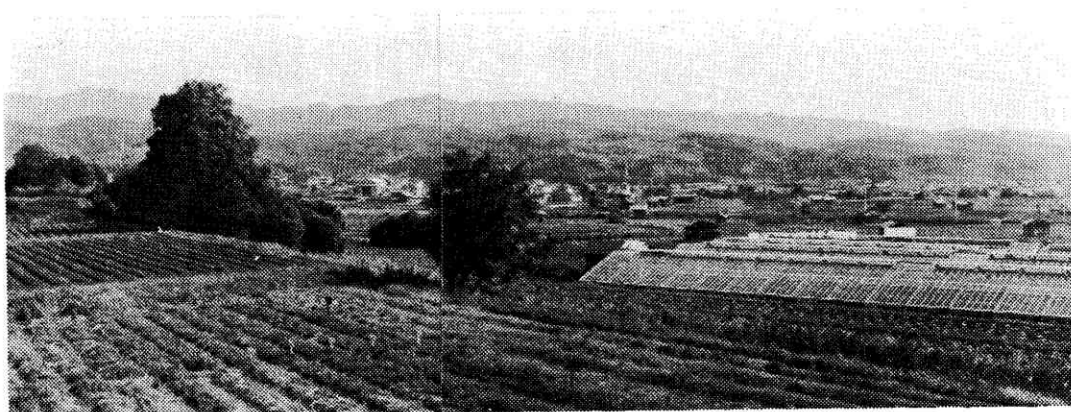
もう一言、この日根莊に関する所見を述べると、旧紀州街道に沿って市場が存在したことである。現在も「市場」の呼称がのこり、南海電車泉佐野駅に近いところでもあって市の中心地となっている。この市場の歴史は日根莊の設置された中世あるいはそれ以前にさかのぼることが想定され、住民の生活につながる交易の場所であるとともに、日根莊で生産された物資を京にはこぶ際にも、その集散地として重要な役割を担う場所であったと考えられる。この市場と関連して当時の交通路を見た場合、ここが和泉の諸地域を経由し、孝子峠を越えて紀伊国に至る街道の要衝であったのであり、九十九王子社の一つ佐野王子跡の存在によって知られる通り、熊野詣の道筋でもあった。こうした陸路のほか、海路にも目を向けなければならないが、泉佐野の地が「佐野湊」として、泉州海岸における港津の一つであったことも想起しなければならない。近世における「佐野湊」の繁栄は、海岸べりにかろうじてのこる「七つ倉」の遺構や豪商食野家等に伝えられているが、その歴史は中世にさかのぼり、日根莊とも大きなかわりがあったことが想定される。従って日根莊という一莊園の歴史は、当時の交通や物資の流通という角度から眺めることも今後の一課題であると思うのである。

- (1) 『日本莊園絵図集成』下巻に収録されている。
- (2) 水田義一氏「台地上に位置する庄園村落の歴史地理学的考察―庄園絵図を史料として―」『史林』第五五巻、第二号所収、昭和四十七年三月
- (3) 大阪府教育委員会『檀波羅密寺発掘調査概要』(『大阪府文化財調査概要』一九七二―九、昭和四十八年三月)

日根莊の現地調査に当たっては、本学史学科卒業生奥野一代、四回生藤井ゼミの長滝谷典子両嬢のお世話になった。



第1図 日根野村絵図 (『日本荘園絵図集成・下』より)



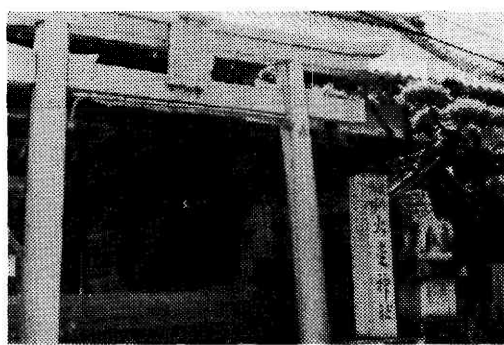
第2図 日根荘の現景



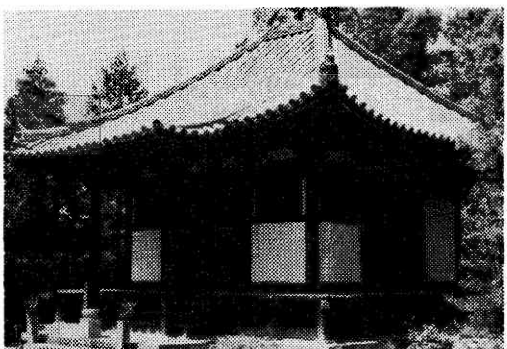
第3図 日根荘の地域 (1:50000地形図「岸和田」)



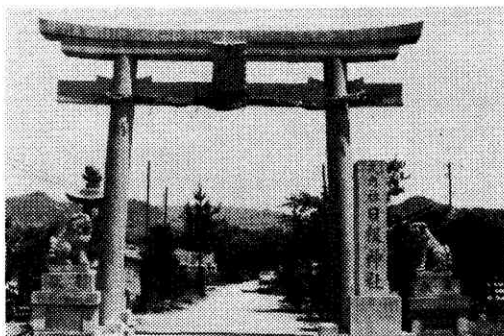
1



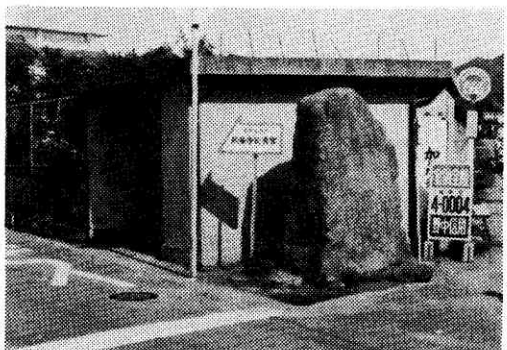
2



3



4



5



6

第4図 日根荘とところどころ

- | | |
|-----------|----------------|
| 1. 新池 | 2. 火走神社 |
| 3. 慈眼寺本堂 | 4. 日根神社(大井関明神) |
| 5. 小塚の勝示石 | 6. 蟻通神社 |

二 古代・中世における物資の生産と流通

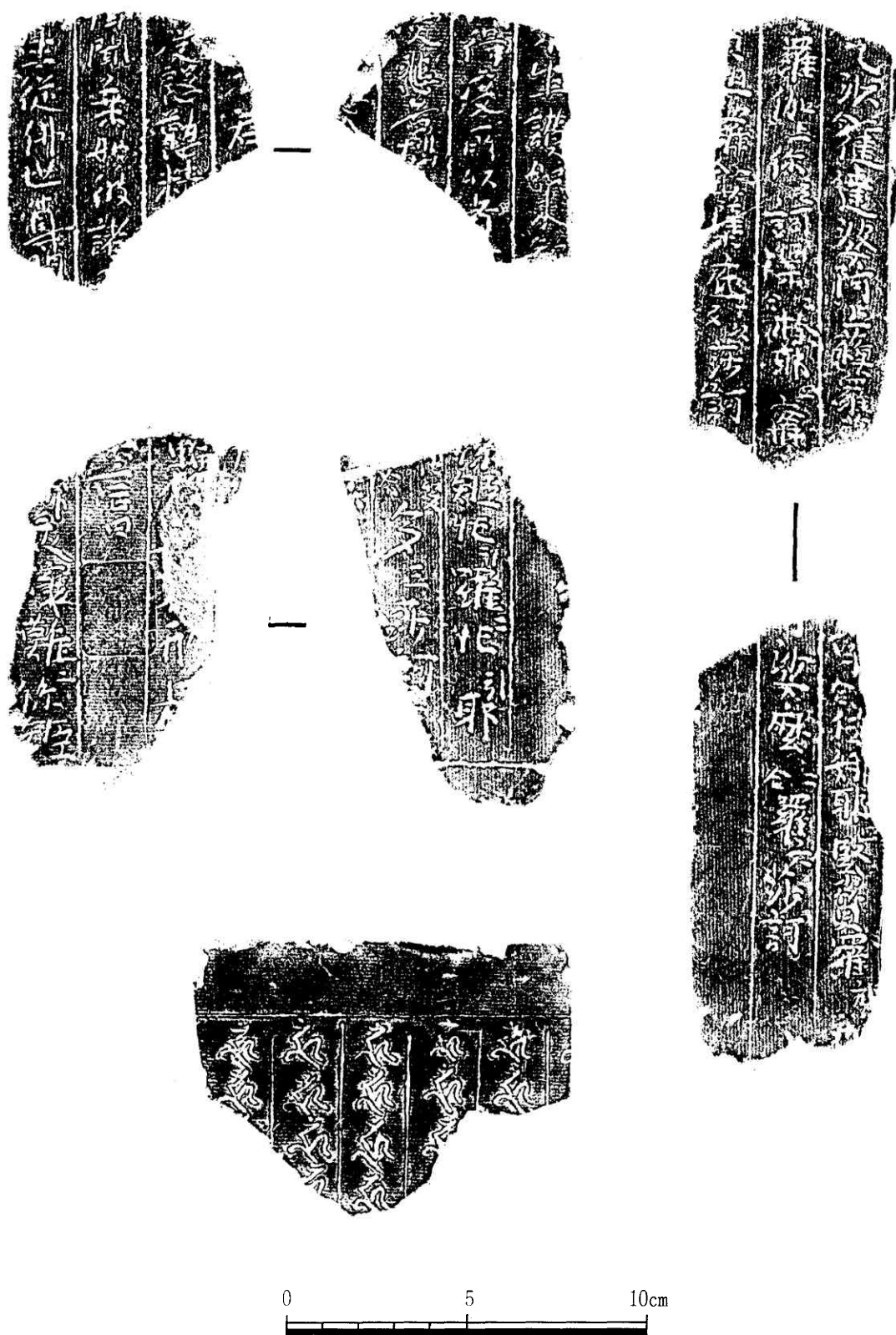
1 伊勢小町塚経塚出土の瓦経と陶製光背

昭和五十六年に本学に寄託された「井上氏旧蔵資料」は、幕末から明治にかけて国学者として活躍された井上頼国よりくに先生から井上頼文よりふみ先生を経て、民俗学者として知られた井上頼壽先生に至るまで、三代にわたって収集された典籍・古文書・絵図・拓本・民俗資料・考古資料など多様な内容のもので、各分野にわたる研究に役立つ重要な資料である。⁽¹⁾

このうち考古資料は、土器・石器・古瓦などがあり、逐次、資料個々についての検討を進めている段階である。井上頼国・井上頼文両先生収集の考古資料は本来膨大な量に上るものであり、本学に寄託されているのは全体的に見ればその片鱗にすぎないが、たとえ小さな土器片であっても、その出土地や入手された経路が克明に墨書されていて、考古学でいう一、等資料であり価値が高い。

この中に四点の瓦経片がある（第5図）。これだけは例外的に出土地が明記されていないが、その一片が梵文であることと、経文の字体から、一見して伊勢小町塚経塚の出土品だろうと判断した。さらに資料の整理中に、別に瓦経片ばかりを手拓された四冊の拓本の綴りがあり、この中には一括して国の重要文化財に指定されている瓦製光背の拓本が綴られていることから、この拓本集が間違いなく小町塚経塚のものであることが明らかになった。

伊勢国小町塚経塚は、現在の伊勢市浦口町三丁目の小丘上に所在したが、明治時代に小丘の一角が墓地として開かれた際、瓦経をはじめとする夥しい遺物が出土したようである。当時から多くの人びとの注意に上り、学界周知の瓦経出土遺跡となっている。⁽²⁾ただし出土遺物については、発見以来諸氏によって採集され、随所に散らばって所蔵されている状態で、そのくわしい状況は不明である。「井上氏旧蔵資料」中の拓本集は、おそらく井上頼国・頼文先生のいずれかが伊勢に在住されていた当時に、各所に所蔵されていた瓦経片を手拓されたもので、現物ではないが、現在としては、小町塚出土の瓦経資料としてはもっともまとまった資料と思われる。これについては、いずれ資料集として刊行する予定である。



第5図 伊勢小町塚経塚出土瓦経 (大手前女子大学保管)

ところで、この瓦経は平安時代末の承安四年（一一七四）の五月から七月にかけて、三河国渥美郡伊良期郷にあった万覚寺の僧西観・遵西らが願主となり、その勧進によって、伊勢神宮外宮の神官度會常章・春章らが檀越、それに佐伯國親の一族や磯部氏・大中臣氏らが参画して作成埋納されたことが所刻銘文によって知ることができる。数多くの破片のうち、願文の部分がよくのこっているのは早稲田大学所蔵のもので、周知の資料ではあるが、その全文を掲げておく。

(表)
妙法蓮華経卷第六

承安四年^{甲午}五月^{庚午}廿九日 於南閭浮提日本國

東海道三河國渥美郡伊良期郷

西観之勧進釋迦末法之時 妙法蓮

而如法奉書寫了 大勧進金剛佛子

檀越度會常章

女檀那度會氏子

度會春章

助筆願主等 僧良中悲母

散位佐伯國親 女弟子磯部

六卷十八

(裏)
員男女子等

佐伯清俊 同常吉 同四郎 同五郎

同六郎 同氏子如意 同満 同犬子等

過去祖父祖母等

女弟子之養父沙弥妙寂 養母紀氏

歴史時代考古学の視点(二)

歴史時代考古学の視点(二)

日親之親父三河友吉 母嶋氏子

養父母坂本清里 物部氏乃至七世四恩

三河友安 僧印西 法界衆生等

當御厨前領主度會神主常行

右以結縁書寫力如此等与有縁徒衆

浄土往生證无生法忍預佛記捌得

先來此界引導有縁人訪有縁者乃

於一切衆生

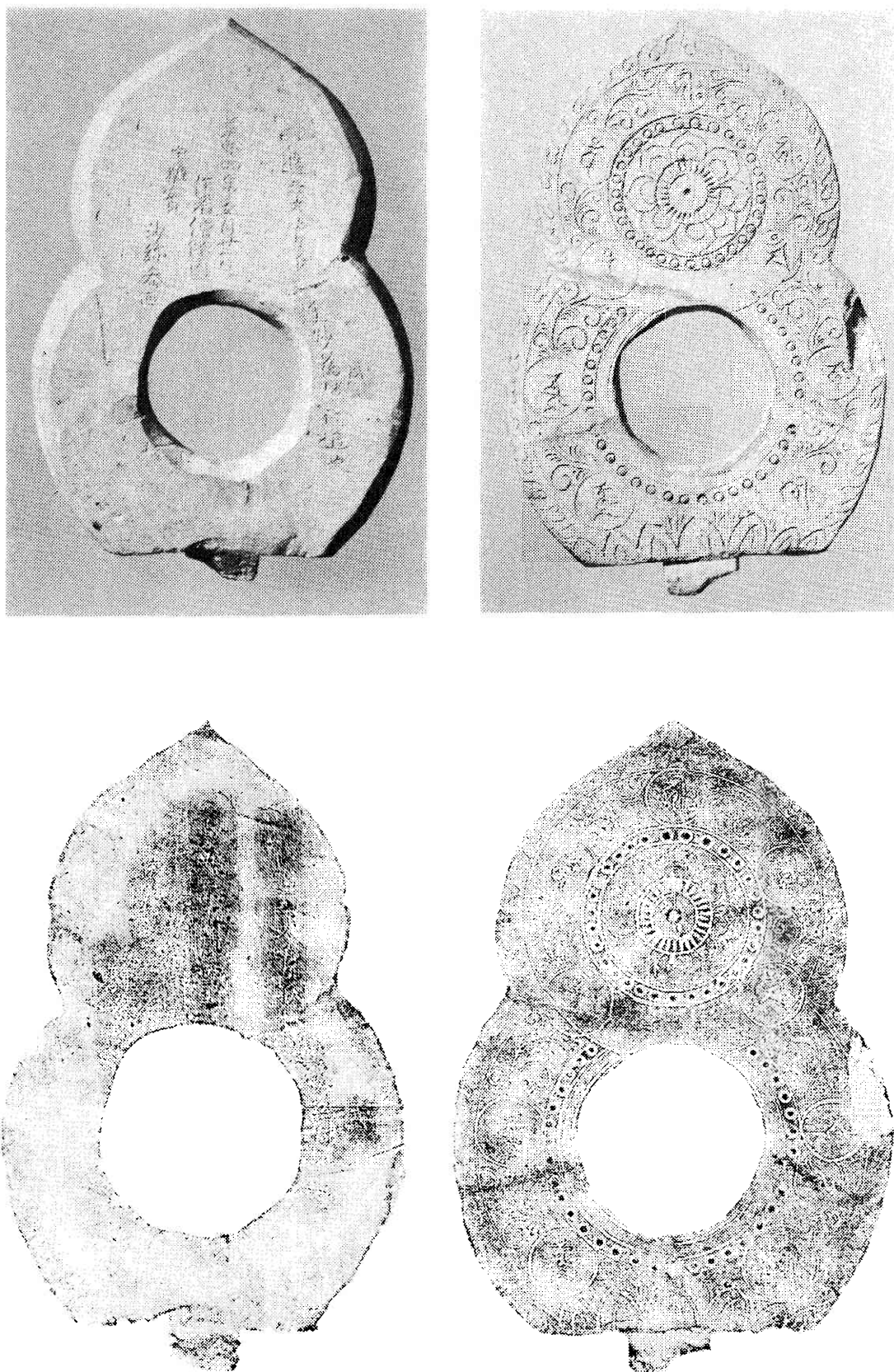
界分身散影和光同塵下歟結縁

至一切智地如彼普賢觀音等

また、この瓦経を焼成した窯は、渥美半島の突端に位置する現在の愛知県渥美郡渥美町伊良湖に所在する瓦場遺跡群で発見されている。⁽⁴⁾

瓦製光背は、東京国立博物館に二枚が所蔵され、大阪府泉大津市の故細見亮市氏のもとに所蔵されている一枚があり、これらの資料は、昭和五二年に奈良国立博物館から刊行された『経塚遺寶』に収録されている。細見氏の所蔵のものは半分を欠失しているが、全体が三片に折損しているようで、津田守一氏によって紹介された三重県津市の廣永陶苑所蔵の破片はその欠失部分の一部に当たる。⁽⁵⁾ これらの他にさらに二点の存在も知られており、合わせて五点の瓦製光背が存在したことが想定される。仏像自身は知られていないが、東京国立博物館には別に台座が所蔵されている。光背の寸法を比較すると、一点がやや大きく、刻まれている文様にも相異が見られるが、これを胎藏界中尊の大口如来に充て、あと四点を四仏に充当すると胎藏界五仏が作られ、瓦経とともに埋納されていたことが知られる。

東京国立博物館に所蔵されている二点のうち、寸法のやや小さい一点の方には裏面に刻銘がある(第6図)。古くは木崎愛吉氏の『大日本金石史』をはじめ『日本彫刻史銘文基礎集成』や『平安遺文金石文編』、さらに関 秀夫氏の「経塚遺物の紀年銘文集」(『東京国立博物館紀要』第一五号、昭和五五年)にも収録されているが、次のように判読されている。



第6図 伊勢小町塚経塚出土の瓦製光背（東京国立博物館所蔵）同拓本（井上氏旧蔵資料）

過去大中臣氏 蓮妙^成為佛得道也

承安四年五月廿一日

作者僧隆圓

中 雅實

沙彌參西

銘文中の人物三名のうち、僧隆圓・沙彌參西については問題はないが、中央の雅實の上にある一字は、□(伏字)あるいは中とされているものもあり、従来は一応「中」と読まれて来た。しかし手許にある「井上氏旧蔵資料」中の拓本を見て、これは「中」ではないと即座に感じた。そこでどうしても実物を見て判読して見る必要を痛感し、昭和五十六年五月、日本考古学協会総会出席のため上京した機会に東京国立博物館をたずね、同館学芸部長三宅俊之、考古課長亀井正道、考古課関 秀夫三氏のご厚意の下に現物を出していただき些細に検討して見た。まず「中」と読まれて来た字をよく見ると、

① 「ウ」かんむりの字であること。

② 縦画が通っていないこと。

の二点から「中」ではないことはすぐわかったが、では何と読む字なのかはむずかしく、即断はできなかったが、ウかんむりの下にある縦画が、左側ではねて上にあがっていることから「寸」とすることができるとは思えないかと考えた。「寸」のは明瞭ではないが、これが紙の上で文字ではなく粘土板の上に彫ったヘラ書きの文字であることから、「寸」を書くつもりがこのような表現になったのではないかと考えるのである。従ってウかんむりの下に寸を書くことと「守」となり一応「守」と読んで見ることにしたい。すると、下につづく人名の雅實は「守雅實」となる。守は国守すなわち国司であるから、この守はおそらく三河守を意味するのであろう。これによって、承安四年五月にこの瓦製光背が製作された時点での三河国守として、雅實という人物が浮かんで来るのであり、歴代の三河国守(司)の空白を埋めるとともに重要な事実の展開していたことを指摘できるのである。⁽⁶⁾

ここで想起されるのは、同じ渥美半島、現在の愛知県渥美郡田原町に所在する大アラコ窯跡から出土した有名な頭長銘の壺である。⁽⁷⁾ 渥美焼の

大型の壺で、窯跡からは大よそ同文の銘文の刻まれた破片はいくつも発見されているが、全文は次のように判読されている（第7図）。

正五位下行兵部大輔兼

三河守藤原朝臣

頭長

藤原氏

比丘尼源氏

從五位下惟宗朝臣

遠清

藤原氏

惟宗氏

内蔵氏

惟宗氏尊靈

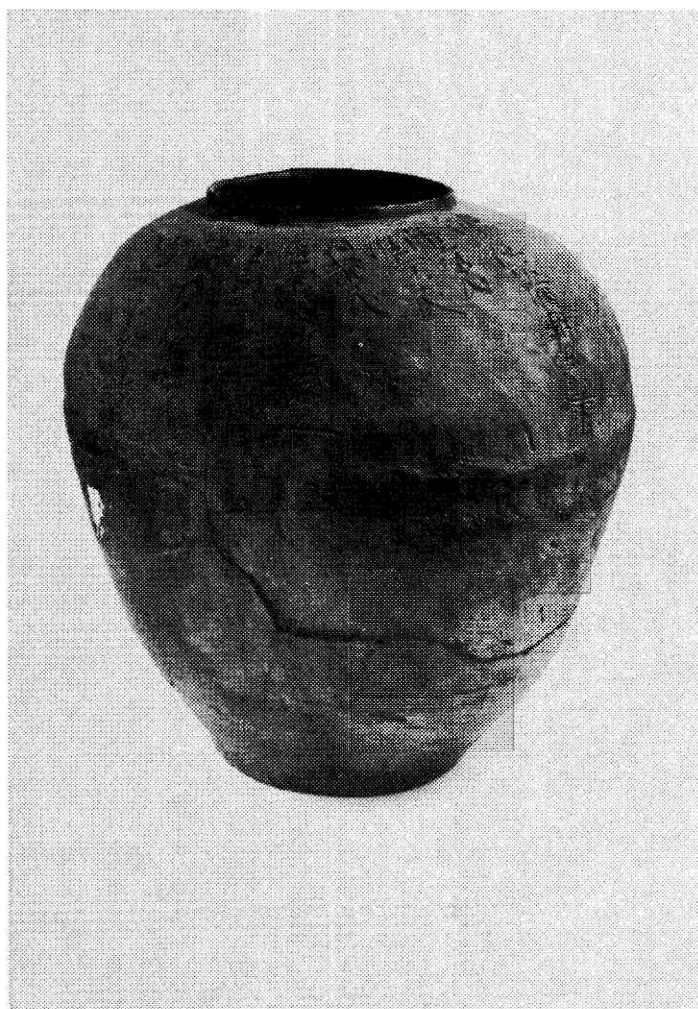
惟宗尊靈

藤原尊靈

道守尊靈

この壺は、歴史上に実在した人物名が銘文中に登場することから、発見当時から話題に上り、実年代が明らかである上で、渥美窯とその製品の編年に際しての重要な資料となっている。銘文中に見える藤原頭長は、『公卿補任』によると、保延二年（一一三六）か

歴史時代考古学の視点（二）



第7図 頭長銘の壺（愛知県陶磁資料館提供写真）

歴史時代考古学の視点(二)

ら久安元年(一一四五)までと、久安五年(一一四九)から久寿二年(一一五五)の間、三河守として在任したことが知られる。従ってこの壺が焼成された大アラコ古窯は、山茶碗の編年との対比から十二世紀前半に開始されていたと考えられているが、その生産に国司の勢力が係わっていることを単的に示しているのである。このことを頭に置いて考えると頭長銘の壺よりはやや年代が降ることになるが、おそらく瓦経と共に伊良湖瓦場遺跡でつくられたと考えられる瓦製光背所刻の人名を「守 雅實」としても、その歴史的背景において支障を来すものではないであろう。いいかえれば、小町塚経塚に埋納された一連の経塚遺物の生産に、国司層の勢力が大きく関わっていることを物語るものなのである。

このことは、すでに柴垣勇夫氏が指摘・論及されていることをより発展させることになるが、ここでは問題提起にとどめておくことにしたい。なお本稿の後節でとり上げることとも関連するが、伊良湖の瓦場遺跡では、東大寺再建伽藍所用の瓦を焼成していることが知られているが、三河国―伊勢神宮―東大寺という三角関係が成立していることが推察される。この三角関係がどのような背景のもとに成立したのかということについても大きな課題となるのであり、物資の生産と流通という経済的事象の背後に介在する政治的性格を示唆しているのである。

- (1) 大手前女子学園『学園創立三十五年記念展示資料目録』(昭和五五年十一月)
- (2) 『井上氏旧蔵資料』中に『遺物一覧』二冊がある。
- (3) 小町塚経塚についての文献は数多いが、和田年弥氏の「伊勢小町塚経塚の研究」(『三重考古』第三号、昭和五五年五月)に網羅されている。
- (4) 愛知県教育委員会『渥美半島埋蔵文化財調査報告』(昭和四二年三月)
- (5) 津田守一氏「三重県広永陶苑所蔵の陶製光背片」(『考古学ジャーナル』第一九一号、昭和五六年六月)
- (6) この年代に当たる雅實という人物名は『公卿補任』には見えない。承安四年前後の三河国司は、太田 亮博士の『日本国誌資料叢書・三河』でも『愛知県史別巻』(昭和一四年)でも空白になっている。この点についてはさらに検討しなければならないと思っている。
- (7) 『大アラコ古窯址群』(『田原の文化』第五号、愛知県渥美郡田原町文化財調査会、昭和四八年十一月)また、『田原町史・上』(昭和四六年十二月)には「古代・中世の窯業」として渥美古窯の遺跡・遺物がくわしく紹介されている。
- (8) 柴垣勇夫氏「古代窯業の発展―須恵器生産の展開と中世陶器の成立―」(『古代の地方史四、東海・東山・北陸編』所収)

2 魚住古窯址とその製品

西日本各地において、古代末期から中世にかけての、須恵器を生産していた古窯としては、従来、備中の亀山焼がとり上げられて来たが、他にも美作の勝間田古窯⁽²⁾、讃岐の十瓶山古窯等の存在が明らかにされている。播磨の地域においても、久留美古窯址⁽³⁾（三木市久留美）、与呂木古窯址⁽⁴⁾（三木市志染町与呂木）、宿原古窯址⁽⁴⁾（三木市志染町宿原）、神出古窯址⁽⁵⁾（神戸市西区神出町）、魚住古窯址⁽⁵⁾（明石市魚住町）があり、これらの窯では須恵器とともに屋瓦の生産も行なわれており、ここでは生産された屋瓦は山城の六勝寺の造営に当たって、六勝寺に使用するものとして供給されたことが知られている。これについては、上原和人氏の精緻な論文があり、⁽⁶⁾ 屋瓦の編年が窯の年代を決める上での資料として大きな役割を果たしているのである。

魚住古窯址は、兵庫県明石市魚住町中尾と同大久保町西島に所在している。付近一帯は、広大な面積を占める播州平野の一部に当たり、播磨灘に面して台地上の地形がひろがっている。古窯址の分布は二群が見られ、一つは南方の赤根川に沿ったところに分布する赤根川支群、いま一つは北方の中尾川に沿ったところに分布する中尾川支群があり、計三十六基の存在が確認されている。このうち中尾川支群では片口鉢・甕のほかに屋瓦の生産も行なわれており、屋瓦の一つは六勝寺のうちの尊勝寺跡から同範の遺例が発見されていることから、窯の操業年代を平安末・鎌倉とし、赤根川支群では屋瓦が出土しないことから、鎌倉以後、室町時代の中ごろまでの操業と考えられている。

魚住古窯址の存在が知られるようになったのは昭和三十年代に入ってからのもので、『魚住村誌』にはじめて紹介され、その後、明石市在住の黒田義隆・水富義浩氏によって、さらに兵庫県教育委員会の大村敬通氏によって分布調査が行なわれた。昭和五十四年になって、窯址群の所在する場所を明姫幹線が通ることとなり、同年五月から八月にかけて兵庫県教育委員会による発掘調査が大村敬通氏を担当者として実施され、窯の構造、須恵器の生産工程等について多くの知見が加わった。⁽⁷⁾

屋瓦だけでなく、この魚住古窯址群で生産された須恵器は、摂津・河内・山城・近江の諸地域など、淀川・大和川水系をさかのぼる各地に、さらに東は神奈川県鎌倉市、西は山口県の秋根遺跡から九州に及ぶ広い範囲にまでもたらされていることが、大村敬通氏によって明らかにされている。窯自身が、中尾川・赤根川など、現在では小さい流れではあるが河川に面しており、ここで生産された須恵器や屋瓦は、これらの河川

を利用し、瀬戸内海を経て輸送されたことが想定される(第8図)。

魚住古窯址の存在する地域にほど近いところには、播磨灘に面して、古来有名な五泊の一つ「魚住泊」がある。瀬戸内海に面した泊、すなわち風待ち、潮待ち等で船舶が停泊するところであり、魚住古窯で生産された須恵器・瓦は一旦ここに運ばれ、ここで大船に積みかえられて瀬戸内海を東進したことが想定されるのである。従って、この「魚住泊」は、魚住古窯の須恵器・瓦の生産と流通を考える上において決して無関係ではなく、緊密な関係と重要な役割を果たしていたに相違ない。このことは、調査者である大村氏も問題点として指摘されている。

五泊については、三善清行が、延喜十四年(九一四)醍醐天皇に上申した「意見封事十二箇条」に、

山陽、西海、南海三道、舟船海行の程の^{せう}押生の泊より韓泊^{から}に至る一日行、韓泊より魚住泊に至る一日行、魚住泊より大輪田泊に至る一日行、大輪田泊より河尻に至る一日行、これ皆行基が程を計りて建置する所なり

とある。千田稔氏は、この五泊について歴史地理学的考察を加えられ、五泊の所在地を次のように比定されている。⁽⁸⁾

榎生泊・兵庫県揖保郡御津町室津

韓泊・兵庫県姫路市の形

魚住泊・兵庫県明石市江井島

大輪田泊・兵庫県神戸市兵庫区和田崎町

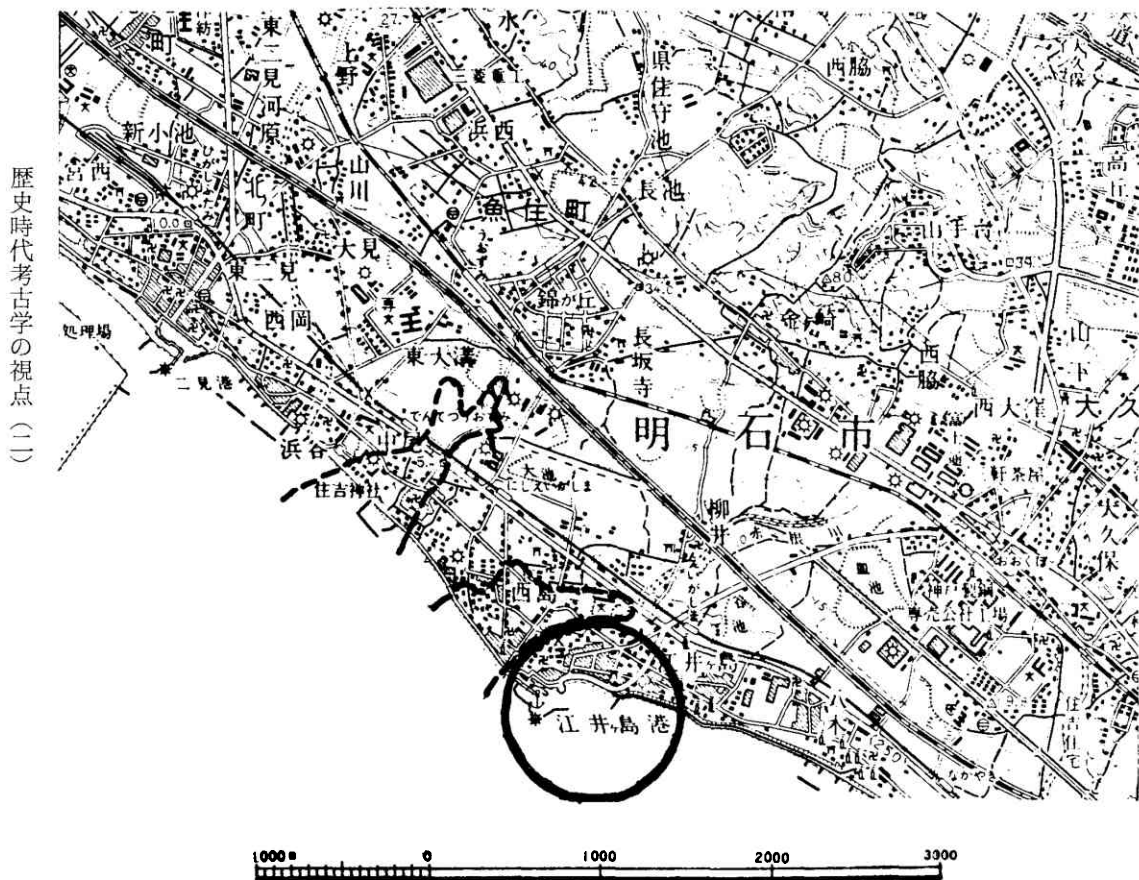
河尻泊・兵庫県尼崎市今福

「意見封事十二箇条」はつづいて、

而るに今、公家唯輪田泊を修造する。長く魚住泊を廃す、是に由りて公私舟船、一日一夜韓泊より輪田泊に兼行す。冬月風急、暗夜星稀なるに至りて舳艫^{じくく}の前後を知らず、此の泊天平年中建立する所なり・其後延暦の末に至る五十余年、人其の便を得る。弘仁の代、風浪^{しん}侵^{しん}齧^{けつ}し、石頽^{けつ}れ沙漂^{しん}う

とあり、行基によって築かれた五泊のうち魚住泊が当時風浪によって破壊しているのを修築するようにとの意見を述べているのである。

『類聚三代格』卷十六「船瀬并浮橋布施屋事」には、天長九年(八三二)、播磨国に対して魚住船瀬を修造することを命じた「太政官符」に、



第8図 魚住古窯址群と魚住泊の位置

昭和57年11月3日に神戸市立博物館が開館した。港湾都市神戸にふさわしく、原始時代から近代に至る神戸市の歴史を、市域にのこるさまざまな資料を生かし、展示に工夫がこらされている。1～6の大テーマがあり、2、地方文化の発展の下に小テーマとして「地方窯における生産と流通」がとり上げられ、神出古窯址群と播磨系瓦・須恵器の流通のタイトルのもとに、神出・魚住両古窯址の出土遺物が展示されている。同館から発行された『神戸市立博物館常設展示案内』には、次のように解説されている。

播磨系瓦・須恵器の流通

東播磨地方には神出古窯址群のほか、魚住古窯址群（明石市魚住町中尾川・赤根川流域）、三木古窯址群（三木市与呂木・久留美・宿原・跡部）などの古窯址群が分布している。三木古窯址群は11世紀末～12世紀末頃の窯址で、多くが瓦陶兼業の窯である。高砂市の魚橋瓦窯址は平安時代末期から鎌倉時代初期にかけてのもので、瓦の生産が主であった。魚住古窯址群は、神出・三木古窯址群におくれて12世紀頃に操業が始まり、15世紀前半頃までつづいた東播磨地方の代表的な中世窯業の地であった。

これらの窯で生産された日常雑器や瓦が京都をはじめ広範囲な地域から出土しており、当時、東播磨の古窯址がこれらの一大供給地であったことが知られるようになった。東播磨の窯址で出土する瓦と、文様や製作技術の共通する瓦が、院政期に盛んに造営された京都の六勝寺や鳥羽離宮に多く出土しており、京都での造寺、造営の興隆に対応して、播磨系瓦の生産が拡大されたものといえよう。

また、魚住古窯址群に近接する魚住泊は、12世紀のおわりに僧重源によって修築が行なわれ、その後も整備がなされており、魚住泊が片口などの製品の海上輸送ルートの一つとして重要な役割を果たしていたと考えられる。事実、明石沖などから片口が少なからず引揚げられている。

歴史時代考古学の視点(二)

應^{イラヌミ}早造^{イラヌミ}魚住船瀬^{イラヌミ}一事

右太政官今月十日下^ニ播磨國^ニ符傳。大納言正三位兼行左近衛大將民部卿清原真人夏野奏狀傳。魚住地在^ニ明石郡海崖^ニ。諸國舟船入^レ京要路。而東西无^レ嶋南海闊遠。微風動吹波濤山起經^{ノ如ニ}。過之輩能存者鮮。因^レ茲私以^ニ封物^ニ草^ニ創舟泊^ニ。加^レ功稍半頗免^ニ艱難^ニ。而事非^レ緣^ニ公成^ニ功難^ニ究。伏望。頼^ニ公力^ニ以^ニ樂^ニ其成^ニ者。被^ニ中納言從三位兼行中務卿直世王宣^ニ傳。奉^レ勅。益^ニ國利^ニ民其要當^ニ然。宜^ニ使^ニ國司次官已上一人^ニ專^ニ當彼事^ニ早動^ニ造作^ニ者。但其新物用^ニ正税^ニ每年季^ニ進^ニ功帳^ニ。

天長九年五月十一日

さらに貞觀九年(八六七)、元興寺僧賢和・賢養の修造に対して下した「太政官符」として、

應^{イラヌミ}令^{イラヌミ}播磨國聽^{イラヌミ}造^{イラヌミ}魚住船瀬^{イラヌミ}一事

右得^ニ元興寺僧傳燈法師位賢和牒^ニ傳。夫起^ニ長途^ニ者。次^ニ客舍^ニ而得^ニ息。渡^ニ巨海^ニ者。入^ニ隈泊^ニ而免^ニ危。則知海路之有^ニ船瀬^ニ。猶^ニ陸道之有^ニ逆旅^ニ。伏見^ニ明石郡魚住船瀬^ニ。損廢已久未^ニ能^ニ作治^ニ。往還舟船動多^ニ漂没^ニ。匪^ニ唯物損^ニ於公私^ニ。深悲^ニ人墜^ニ於非命^ニ。繕修之可^ニ務尤急^ニ於道橋^ニ者也。望請。與^ニ講師賢養^ニ共同^ニ心勦力^ニ。試加^ニ營造^ニ。以遂^ニ宿情^ニ者。右大臣宣。件泊頽壞之後。年紀稍積。將^ニ造之議^ニ。公家不^ニ忘。而今^ニ僧慷慨一向輸^ニ誠。念^ニ彼志慮^ニ。何不^ニ助嘉^ニ。宜^ニ下^ニ知國司^ニ令^ニ得^ニ成功^ニ。

貞觀九年三月廿七日

がのせられているが、効なく、再度の修築要請となったのである。魚住泊の損壊の原因は、海岸侵蝕によるものと考えられている。

その後、魚住泊の修築が、平重衡の南都焼討によって焼失ののち、再建の立役者となった俊乗坊重源によって行なわれていることに注目しなければならぬ。それは重源自身によって記された『南無阿弥陀佛作善集』に、

魚住泊彼嶋者、昔行基并(菩薩)為人築此泊、而星霜漸積、侵損波浪、然間上下船遇風波、漂死輩不知幾千、仍遂并聖跡、欲復舊儀

とあることによって知られるが、その年時は伝えられていない。しかし、建久七年(一一九六)六月三日付の「太政官符」によって、重源による修築が建久七年のことであり、修築の事業が成功したことがわかるのである。⁽⁹⁾

播磨国における重源の事跡は、この魚住泊の修築ばかりでなく、より重要なことは、本来東大寺領であった大部庄が東大寺の再建に当たって

中国から来日し、技術面で腕をふるった陳和卿^{ちんわ}への恩賞として重源に下され、重源はここに播磨別所として浄土寺を造営したことである。それは、建久八年（一一九七）の「重源譲状」に、

播磨大部庄内別所

浄土堂一字、方三間、瓦葺

安置立像皆金色阿彌陀佛三尊丈六像

佛舍利 鐘

薬師堂一字、同

安置舊佛八百餘軀

とあり、また『南無阿彌陀佛作善集』の、建仁三年（一二〇三）ごろの記事に、

播磨別所

浄土堂一字奉安皆金色阿彌陀丈六立像一、并観音勢至

一間四面薬師堂一字奉安堅丈六一、

湯屋一竈在常湯一口。

^{（証力）}
鐘一口 始置迎講之後二年始自正治二年

彌陀来迎立像一射 鐘一口

と記されていることによって明らかである。播磨国大部庄は、現在の兵庫県小野市浄谷町を中心とする地域であるが、そこには、この時重源によって建立された浄土寺が所在し、天竺様建築として著名な宝形造の浄土堂があり、来迎阿彌陀三尊像と共に国宝に指定されている。

浄土寺の所在する小野市は、播州平野を貫流する大河川の一つ加古川の中流、その左岸に位置しているが、加古川を主流とする河川のすべてが、浄土寺の造営さらに播磨別所の経営に際して重要な役割を担っていたに相違ない。重源による別所は、この播磨のほか、摂津渡部^{わたなべ}別所（現在の大阪市東区の淀川べり）・伊賀別所（三重県阿山郡大山田村、新大仏寺を造営）があり、周防国における阿彌陀寺の造営をふくめて、これらの別所

が東大寺の復興事業と不離の關係があつたのである。すなわち、重源による仏教の普及をなかだちとして、これらの地域または莊園から、さまざまな物質を調達するための拠点であつたことである。従つて、これらの別所の造営と維持管理において、物資の輸送とそのための輸送路を確保することは、重源にとつては重要かつ不可欠な作善であつた。

浄土寺が造営された大部庄と、重源が修築した魚住泊との直接的なつながりは史料的には裏付けることができないが、加古川をはじめとする諸河川および播磨灘を通じて緊密に結ばれていたと考えられるのである。

いま一つ重要なことは、浄土寺の建物に使用された屋瓦が、神戸市西区に所在する神出古窯址で製作されていることであり、重源の作善業と窯業生産とのつながりが指摘できるということである。⁽¹⁰⁾

さらに、重源による東大寺大仏殿をはじめとする伽藍の復興・再建に当たつて、その所用の屋瓦を備前国および三河国で焼成しているという事実がある。備前国の場合、作善集そのものには記されていないが、作善集の建仁三年(一二〇三)七月の紙背文書に、

御瓦用塗料九百七石七斗二升

御瓦運上雑用六百八十六石三斗四升四合

除新田庄冊石定

吉岡御瓦口^{納力}二百二十一石三斗七升四合

という記載がある。ここに見える吉岡は地名で、現在の岡山県赤磐郡瀬戸町の万富^{まんじふ}のことである。従つて、この史料は吉岡すなわち万富の地における瓦の生産と、その輸送の事実をたしかめることができる。⁽¹¹⁾ 万富には東大寺所用の屋瓦を實際に焼成した瓦窯が存在し、「東大寺大佛殿」の文字を入れた瓦の出土が古くから注意されており、昭和五十四年には発掘調査が行なわれた。⁽¹²⁾

同じ紙背文書には、

梶取安清御瓦^{御用}雑用請懸

魚住梶取清傍雑用請懸

の字句があり、万富で製作された屋瓦が「梶取」すなわち船頭によって輸送されたことが知られる。万富の地の東には吉井川が流れているが、

吉井川を下って瀬戸内海に出、瀬戸内海を東進し、さらに淀川から木津川をさか上って東大寺に運ばれたことは、重源につながる他の資財と同様である。

ここでもう一つ、「魚住梶取」の登場することに注意しておきたい。魚住は播磨国明石郡に所在する港津であることは先に述べたが、東大寺瓦の輸送に当たっても寄港地であり、魚住の船頭が中継の役割を果たしていたとも考えられるのである。

以上のことから、魚住古窯址で生産された片口鉢や甕あるいは屋瓦等の物質は、魚住泊から各地にはこばれたと考えられることはもちろん、重源による魚住泊の修築を通じて、播磨国の窯業生産と流通の背景の一端を求めたいと思うのである。

なお、まったくの余談であるが、重源の支配した播磨国大部庄は、南北朝時代になって悪党とよばれる楠木氏の拠点として有名である。大部庄を中心とするこの地域が、中世を通じて物資の生産と流通のさかんであった地域であったということのつながりから考えるのも一つの視点であることを附記しておきたい。

- (1) 岡山県倉敷市に所在する古窯址、西川 宏氏「亀山焼の再評価」『考古学研究』一一三
- (2) 岡山県勝田郡勝央町勝間田に所在する古窯址。
- (3) 香川県綾歌郡綾南町に所在する古窯址。森 浩一・伊藤勇輔氏「香川県綾南町十瓶山北麓窯跡調査報告」
- (4) 是川 長氏「三木市の古窯群」『三木市史』
- (5) 真野 修氏「雄雌岡山周辺の古窯址―神出古窯群（Ⅰ）―」『神戸市古代史』一一三、および同氏「神出古窯址考」『歴史と神戸』九三
- (6) 上原真人氏「古代末期における瓦生産体制の変革」『古代研究』一三・一四、昭和五三年五月
- (7) 魚住古窯址群については、昭和五十四年に行なわれた発掘調査の際、現地を訪れ、大村敬通氏から多くのご教示を得た。大村敬通・伊藤 晃氏「山陽地方の古代・中世窯」『日本の陶磁』その他、『魚住古窯ニュース』一〇九・一〇・一一を参照した。
- (8) 千田 稔氏「古代港津の歴史地理学的考察―瀬戸内における港津址比定を中心として―」『史林』五三一一、昭和四五年。同氏『埋れた港』昭和四九年五月、学生社
- (9) 小林 剛氏『俊乗坊重源の研究』（昭和四六年六月、有隣堂）
- (10) 前掲上原真人氏論文
- (11) 前田 幹氏「備前国と俊乗坊重源」『佛教藝術』一〇五号、昭和五一年一月

歴史時代考古学の視点（二）

(12) 岡山県教育委員会『泉瓦窯跡・万富東大寺瓦窯跡』(『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』三七、昭和五五年三月)

3 陶器の生産と流通

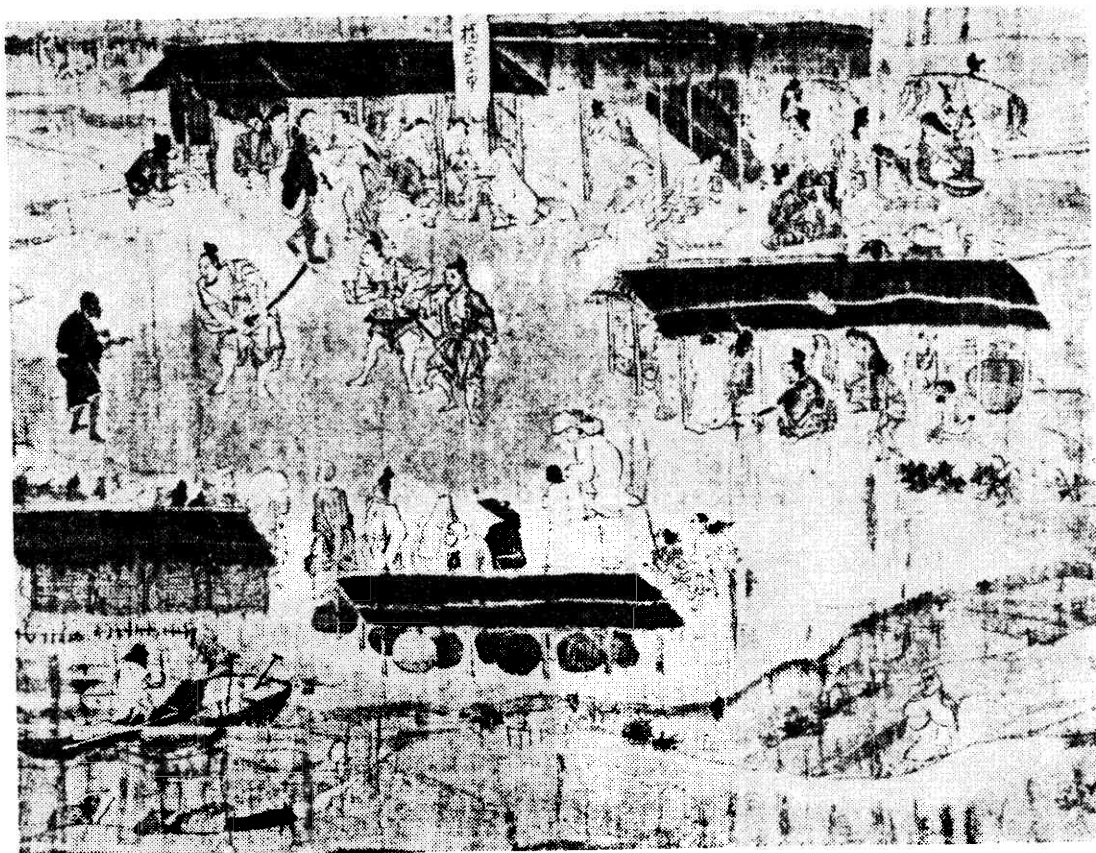
歴史時代に属する諸遺跡に共通し、また普遍的な出土遺物として土器・陶器がある。縄文・弥生時代は、土器そのものが時代を代表するメルクマールとして時代区分の名称に用いられているが、歴史時代にあっても土器・陶器が年代の基準となり、遺跡の性格を単的に示すものであることは他の時代と大差はない。これらの陶器は、畿内地方の古代末期から中世にかけての諸遺跡―寺院跡・城館跡をはじめ、集落遺跡等もふくむ―における一般的な出土遺物であって、調査報告書の中でも、単に常滑の―、備前の―が出土したということ、そのもの自身についての説明が加えられることはあっても、それらの陶器の存在することの意味について、とくに考えられたことは少ない。

戦後における歴史時代考古学の大きな成果の一つとして、窯業生産遺跡の調査と、それにもとづく各地での陶磁器の編年作業をあげることができる。その成果によって、古代における須恵器の生産体制の解明や須恵器の編年が試みられるとともに、尾張、美濃地方における灰釉陶器の生産のように、古代末期に須恵器の生産から変容し、さらに中世陶器を生み出す素地となった地域、あるいはそれとは逆に、河内・和泉にひろがる陶器の古窯のように、中世につながることなく九世紀代に終焉する地域等の相違のあることが明確にされて来た。

古代末期に須恵器の生産から転換して各地域独特の陶器を生み出し、中世さらに近世につづく古窯として、従来、瀬戸・常滑・越前・信楽・丹波・備前の各窯を「六古窯」と呼称して来たが、それだけに限らず、渥美・知多の古窯、能登半島珠洲の古窯など、現在のところ全国に二十数カ所の古窯の存在が知られるようになった。⁽¹⁾

古代・中世に限らず、これらの窯業地帯では、中世末期から近世にかけて、その時代の文化を反映して茶器の生産がさかに行なわれ、東日本では瀬戸・美濃、西日本では丹波・備前のように、古くからの窯業地帯の中で近世のいわゆる施釉陶器がつくられるようになり、肥前唐津のように近世になって発達した窯業地帯もある。

古代・中世はもとより近世にあっても、これらの窯業地帯で生産された陶器・施釉陶器は、諸地域に供給され、それぞれの地域において使用されたのであり、全国各地の遺跡での陶器の存在がそのことを単的に物語っているのである。しかし、現在の考古学では、土器、陶器等の生産



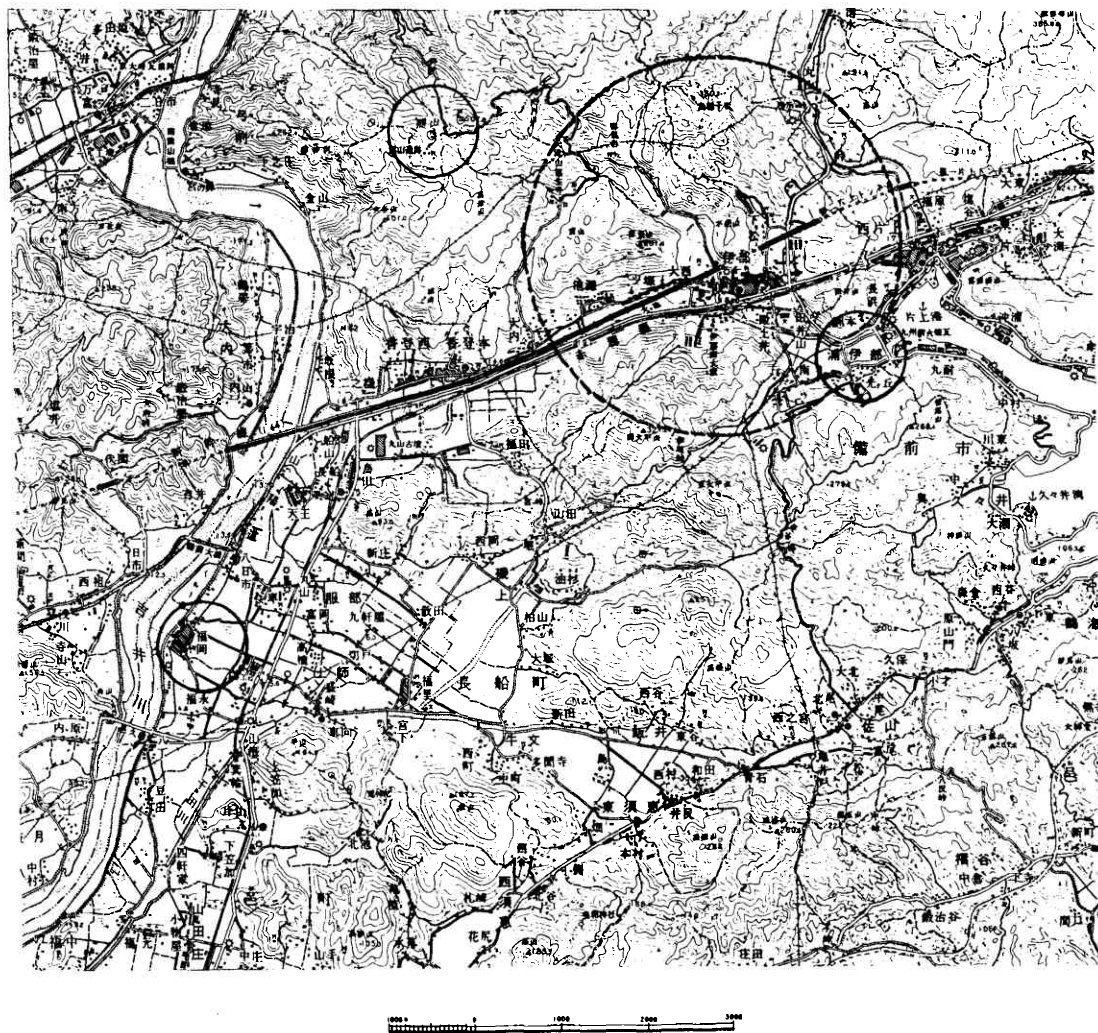
第9図 『一遍聖絵』に見える福岡の市

遺跡が調査され、窯跡の構造や生産方法については十分把握され、土器・陶器の編年が精緻なまでに大きな成果をおさめているのに対して、どのようにして各地にはこぼれたのか、どういう流通機構があったのかということについては意外に無関心であった。考古学ばかりでなく、文献史学の面からも同様のことがいえるが、それは土器・陶器の生産に関する文献史料がほとんどないことに起因しているのかも知れない。そうした意味で、柴崎勇夫氏による尾張・三河・美濃地方の古陶研究や、吉岡康暢氏による珠洲を中心とする生産と流通をめぐる労作⁽³⁾は画期的な成果であり、今後における歴史時代考古学の方向を示すすぐれた業績である。

中世において、一つの遺跡にどこでつくられた「やきもの」がどのように出土しているのかということを示す代表的な遺跡として、広島県福山市の草戸千軒町遺跡がある。ここは福山市を流れる芦田川の下流、その三角州上に存在する遺跡で、芦田川の川床から出土するおびただしい遺物によってその存在が知られ、昭和四十八年以降、広島県草戸千軒町遺跡調査研究所が設置され、逐年発掘調査がつづけられている。その詳細はこの遺跡を紹介されている書物や調査報告書にゆずるが、地元といえる備前をはじめ、遠く瀬戸・常滑の製品や、中国製の磁器、時代の新しいところでは唐津、さらに国産の磁器である伊万里に至るまで、全国各地の窯業地帯で生産されたさまざまな「やきもの」が出土しているのである。

この草戸千軒町遺跡の西側には、現在もそのおもかげをつたえる真言宗明王院があり、鎌倉時代から室町時代、さらに江戸時代の初期に至るまで、門前町・市場町としてさかえた。従って、草戸千軒町遺跡は、はじめて考古学的にとらえることのできた都市遺跡なのである。芦田川の氾濫によって水没したが、かつての川口は遺跡の所在地からそう遠くないところにあったと考えられており、瀬戸内海に通じる港町でもあったのである。

中世における市場の情景を伝えるものとして、しかも、おそらく備前の甕・壺などを商う店先の場面として、つとに知られているのは『一遍聖絵』(京都市、歎喜光寺所蔵)巻四の第三景である。鎌倉時代に浄土教に敬信し、諸国を廻ってその教えを弘めた一遍上人の伝記絵巻で、この場面は、弘安元年(一二七八)の冬、備前国の吉備津宮神主の子息の嫁が一遍に帰依し、夫の留守中に出家した。帰宅した夫はこれを知って大いに怒り、一遍を追いかけて、福岡の市で一遍になじり寄ったが、かえって諭されて出家をした。というくだりの背景として登場するのが、備前国福岡の市である。同じ場面は『一遍上人絵詞伝』の巻三の第二景にも描かれているが、波の打ち寄せる岸边(吉井川と考えられる)に近いとこ



第10図 備前古窯址群と福岡の市・伊部港の位置

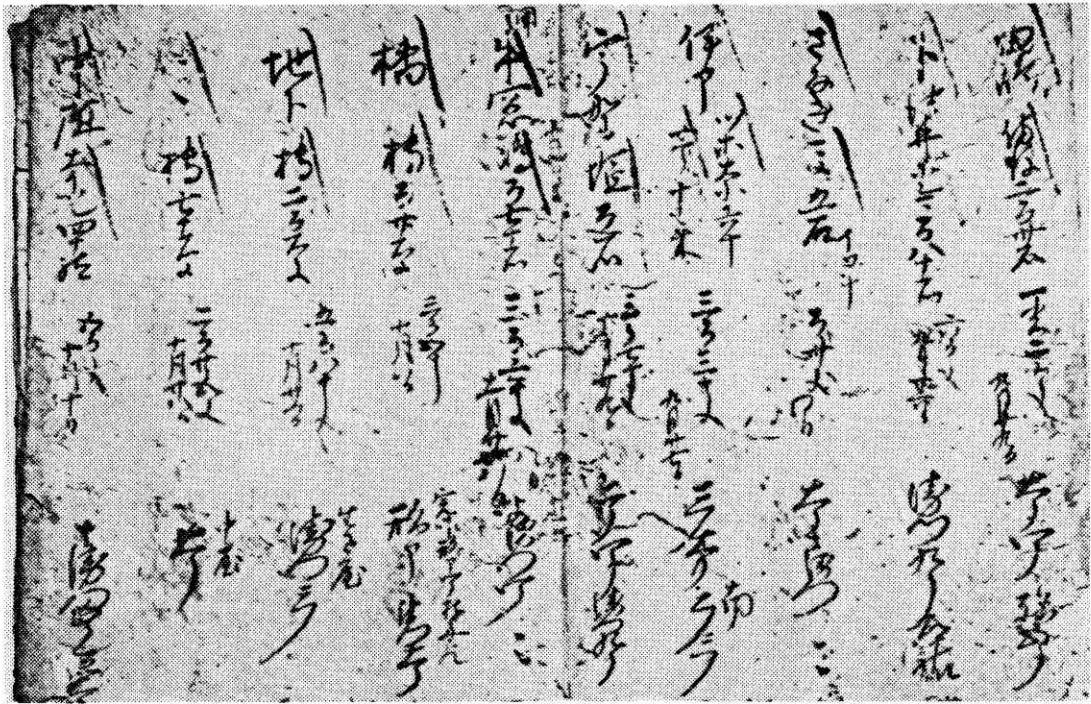
ろに、おそらく草葺で掘立柱の吹き流しの小屋が並んでいる中に壺を並べた店が見られる(第9図)。備前国福岡は現在の岡山県邑久郡長船町にあるが、その所在地から見てここに並べられている「やきもの」が備前焼であったと考えられている。

備前焼は中世古窯を代表する「やきもの」の一つであるが、現在の岡山県備前市伊部を中心とする地域で生産された。元来備前国は、須恵器生産の伝統をもつ国であり、古墳時代以来、邑久郡を中心とする地域に窯跡の存在が知られている。備前焼のはじまったのは平安後期から鎌倉初期とされ、初期には備前市伊部の南北に連なる山麓で窯が築かれていたが、鎌倉中期になって、豊富な燃料を陶土を求めて、北方にそびえる熊山の山間部に入ったところに多くの窯が築かれた(第10図)。

こうして生産された備前焼は、全国各地にはこぼれたのであり、福岡の市はその交易の實際を、草戸千軒町遺跡でのあり方や全国各地からの豊富な出土例は、備前焼の交易圏を単的に示しているのである。昭和五十四年に岡山県立博物館で開催された特別展「備前焼―その流通と時代的特色」は、備前焼の流通をあとづける試みとして、全国から出土している備前焼の資料が集められた。それによると、東は千葉県から、南は鹿児島県に及んでいることがわかる。⁽⁵⁾ 窯の所在する生産地に近い備前・備中・備後・美作の諸国において出土するのは当然であるが、遠く房総半島や九州の最南端まで及んでいることは、備前焼に限ったことではないが、当時における陶器の生産と交易についての問題を考える上において重要な事実なのである。

この時期における備前焼の種類というか器形としては、甕・壺・播鉢が主であり、日常の雑器として使用されたが、甕には、「三石」「二石」等のヘラ描き文字の入った大甕がある。和歌山県那賀郡岩出町に所在する根来寺坊院跡の発掘調査では、この大甕が貯蔵の容器としていくつも並べられた状態で出土し、⁽⁶⁾ 最近調査の行なわれた兵庫県三木市の三木城跡でも同様な例が報じられている。福井市一乗谷に所在する朝倉氏の館跡では越前焼の大甕が同じように使用されているが、寺院の僧坊または城館において穀物あるいは酒・油等を保存・備蓄する容器として、これらの陶器が選ばれその役割を担っていたことがわかる。そうした場合、大量の大甕が備前から紀伊の根来寺にまではるばるはこぼれたのであり、大がかりな流通機構の存在を考えなければならないのである。

最後に、直接流通機構を示すものではないが、中世における陶磁器のうち、備前焼の流通の一端を物語る注目すべき史料として、最近刊行された『兵庫北関入船納帳』について触れておく。⁽⁷⁾



第11図 『兵庫北関入船納帳』の一部

歴史時代考古学の視点(二)

この『兵庫北関入船納帳』は、室町時代の文安二年(一四四五)の一年間、兵庫北関を通過する入船の記録で、船籍地・積載品目・数量・関料・納入月日・船頭・船主(問丸)が克明に記されている。兵庫津は、瀬戸内海における重要な港津の一つで、古くは大輪田泊とよばれ、平清盛の修築ののち日宋貿易の拠点として繁栄し中世に及んだ。兵庫関は、この兵庫津に設けられた関所で、俊乗坊重源が築港の費用として関料の徴収を許されてからは、東大寺が徴収権を掌握していた。南北朝時代に、足利尊氏によって興福寺にも徴収権が与えられるようになって以後、両寺がそれぞれ南北両関を管掌した。

さて、この『兵庫北関入船納帳』に見える品物の中に備前焼がある。すでに小林保夫氏によって紹介され、今谷明氏も同書所載の「瀬戸内制海権の推移と入船納帳」でくわしく論及されているが、それを参考に要約して見る。

第11図下に示したのはその一葉であるが、文安二年六月六日のところに、

伊部ツホ大小四十
大麦ツホ廿五斗俵
二百七十七文
六月十四日
三郎太郎
二郎三郎

というような表記で記されている。十二月までを摘記して表にすると次のようになる。

月	積出港	個数(個)
6月	伊部片上	200
7月	伊部	180
8月	伊部地下*	285
9月	伊部堺	330
10月	伊部	60
11月	伊部	120
12月	伊部	40
		計 1,215

*地下ちげとは兵庫関の地下のことで、兵庫港を船稼の場とする船頭の船で運ばれたことを意味している。

積出港の伊部は、いうまでもなく現在の岡山県備前市伊部であり、片上も同様である。従ってここで積み込まれる「ツホ」は備前焼であることはもちろんであり、一年間を通じて大小合わせて一、二一五個の壺が積出され、兵庫津に運ばれたことが知られるのである(第11図参照)。

兵庫に運ばれてから後の動きはこの史料ではわからないが、この『兵庫北関入船納帳』は、積出港として西宮・尼崎・杭瀬・堺等、大阪湾に入ってから港津の名も見えていることから、これらの港津に運ばれることもあったであろう。また兵庫あるいはその他の港で陸揚げされた後、陸路によって輸送されたことも当然考えられるのである。

いずれにしても、この史料は文安二年における備前焼の隆盛を物語ると同様、少くとも畿内への輸送経路を明示しているのであり、畿内地方ばかりでなく、備前焼の流通を裏づける重要な史料である。

二 古代・中世における物資の生産と流通のうち、「2 魚住古窯址とその製品」および「3 陶器の生産と流通」は、大阪府箕面市に所在する如意谷遺跡の出土遺物とその所見にもとずき、同遺跡の発掘調査報告書（『如意谷遺跡』昭和五七年三月）に掲載した小稿の一部である。同書が限定された部数であり、よく多くの方がたに読んでいただきたいため本稿に再録することとした。

(1) 陶磁器については多くの出版物があるが、橋崎彰一氏『瀬戸・備前・珠洲』（小学館ブック・オブ・ブックスの『日本の美術』四三、昭和五一年十月）を参照した。

(2) 柴垣勇夫氏「古代窯業の発展―須恵器生産の展開と中世陶器の成立」『古代の地方史四、東海・東山・北陸編』所収

(3) 吉岡康暢氏「北東日本海域における中世陶磁の流通」『月刊文化財』二一五号、昭和五六年八月、同氏「中世陶器の生産と流通」『考古学研究』二八―二、昭和五六年九月

(4) 間壁忠彦・間壁霞子氏「備前焼研究ノート」(1)「備前焼の研究」『倉敷考古館研究集録』第一号、昭和三十一年三月、同「備前焼研究ノート」(2)、(同第二号、昭和三十三年三月) 同「備前焼研究ノート」(3)「備前焼窯跡の分布とその性格」(同第五号、昭和三十三年三月)

(5) 岡山県立博物館「備前焼―その流通と時代的特色―」(昭和五四年十月)

(6) 和歌山県教育委員会「根来寺坊院跡発掘調査概報Ⅱ」(昭和五三年三月)

(7) 林屋辰三郎氏編『兵庫北関入船納帳』『中央公論美術出版』(昭和五六年七月)

(8) 小林保夫氏「中世の京都と備前壺」『京都市史編さん通信』八六